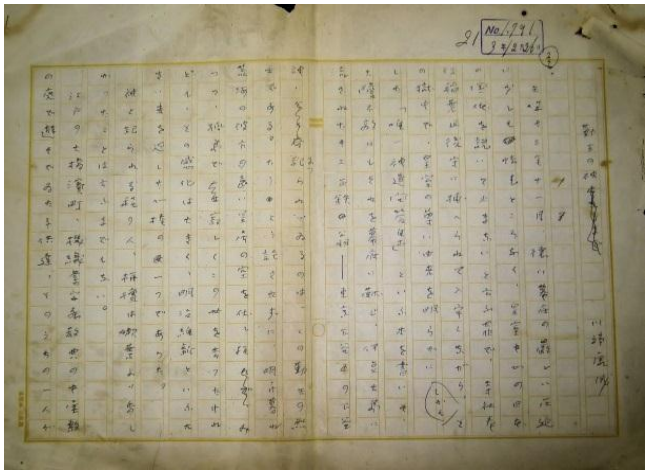
第 134 回貴重書展

川端康成とその時代



川端康成・未発表小説「勤王の神」

（鶴見大学図書館所蔵）

（画像提供：加藤タカシ「キリヌケ成層圏」）

場所：鶴見大学図書館　1F　エントランス

会期：2013 年 6 月 18 日（火）～7 月 11 日（木）

平日　8：50～20：00　　土曜　8：50～18：00　　日曜　休館

ごあいさつ

鶴見大学図書館が所蔵する近代文学者の原稿や書簡の中から、川端康成と、川端と交友のあった文学者のものを展示した。

大正時代の終わりから半世紀にわたって文壇の一線で活躍した川端康成には、世代を超えた幅の広い交友があった。

寡黙で、「あの大きな目を一様に見開いて、ぎょろりと御覧になる」（堀辰雄夫人・多恵子）川端康成の人となりは、取りつく島がなかったようにも伝えられているが、川端を直接知る文壇関係者からは不思議と悪口がほとんど聞こえてこない。実は陰に陽に、川端康成は同時代の文壇人にエールを送り、心づかいをしていた。若き日から 20 年ほど断続的に続けられた文芸時評によって認められ成長した作家も少なくなく、川端は「新人発掘の名人」とも言われた。これは戦後も続き、たとえば三島由紀夫は公私ともに親しい師弟関係にあった。

今回の展示資料は、各作家と川端康成との直接の交わりを示すものではないが、「解題」を通してその交友ぶりの一端を知っていただければ幸いである。

なお、「解題」の執筆には本学博士前期課程の学生である糸日谷輝、香山涼子の両氏がほとんどを手掛けた。また、本学の山田吉郎教授からも多大のご尽力を得た。感謝申し上げたい。

（文学部日本文学科　片山倫太郎）

展示リスト

1. 川端康成・未発表小説「勤王の神」
2. 川端康成　書簡
   （昭和 28 年 3 月 18 日　「鎌倉市長谷二六四　川端康成」より「東京千代田区神田神保町二丁目　三笠書房　竹内道之助」宛）
3. 川端康成　自筆原稿『東京の人』
   〈参考〉初出掲載新聞「北海道新聞」（昭和 30 年 8 月 11 日）コピー
   〈参考〉『完結東京の人』（昭和 30 年 12 月　新潮社）
4. 川端康成書簡
   （昭和 36 年 4 月 25 日　「京都市中京区木屋町三條上ル其中気附　川端康成」より「東京新宿区矢来町七□　新潮編集部　菅原」宛）
   〈参考〉初出掲載雑誌『新潮』（昭和 36 年 6 月号）
   〈参考〉『眠れる美女』原稿（複製）
   〈参考〉『眠れる美女』（昭和 36 年　新潮社）
5. 芥川龍之介　書簡（大正 10 年 1 月 9 日　香取秀真宛）
6. 谷崎潤一郎　書簡（昭和 24 年 11 月 15 日　和気律次郎宛）
7. 横光利一　書簡（昭和 15 年 6 月 15 日　清水一継宛）
8. 宇野千代　書簡（昭和 9 年 5 月 19 日　山口嘉夫宛）
9. 宇野千代　自筆原稿「糸瓜」（小説）
   〈参考〉　『色ざんげ』（昭和 10 年 4 月　中央公論社）※東郷青児の心中事件をモデルにした作品
10. 菊池寛　書簡（昭和 17 年 12 月 30 日　吉川英治宛）
11. 佐佐木茂索　書簡（昭和 20 年 3 月 17 日　久米正雄宛）
12. 三島由紀夫　書簡（昭和 31 年 7 月 15 日　西久保三夫宛）
13. 高見順　自筆原稿「女の出発」
14. 岡本かの子　書簡（年月日　宛先不明）
15. 岡本かの子　書簡（昭和 9 年 10 月 25 日　楢崎勤宛）
16. 岡本かの子　書簡（昭和 10 年 6 月 15 日　阿部保宛）
    〈参考〉『鶴は病みき 短篇小説集』（昭和 11 年 10 月　信正社）
17. 中里恒子　自筆原稿「失われぬ新鮮さ」（随筆）
18. 中里恒子　自筆原稿「隣人」（随筆）
19. 中里恒子　自筆原稿「ソ聯美人にアメリカ男・エレガント喜劇の異色」（随筆）
20. 中里恒子　自筆原稿「伊達のうす着」（随筆）
21. 中里恒子　自筆原稿「幸福なる風景―T 夫人への手紙」
    〈参考〉『乙女の港』（川端康成著　昭和 16 年 4 月　実業之日本社）※中里恒子の代筆とされている。

1. 川端康成・未発表小説「勤王の神」

川端康成の直筆原稿「勤王の神」（400 字詰原稿用紙 21 枚）は、平成 22 年 11 月に本学図書館が古書店から購入した。全集未収の未発表作品である。

川端康成の書体は戦前・戦後で大きく変化したが、本原稿の書体と近似しているのは戦前の昭和 4 年から 8 年にかけての作品「温泉宿」「春景色」「水晶幻想」「わが舞姫の記」「禽獣」「手紙」「夏・逗子・鎌倉・海」「オール浅草レヴイウ日記」等の原稿である。また、この内の 4 作品の原稿用紙は、「勤王の神」と同じ〈神楽坂 山田製〉であると確認できる。

１枚目の右上には青の枠印があり、〈NO.1791〉〈3 年 12 月 26 日〉と記されている。出版社による通し番号と受付日と思われる。昭和 3 年暮れの執筆と推察されるが、本文に割付けがないため掲載に至らなかったことが分かる。

本原稿は、江戸後期の神道家で禊教の教祖・井上正鉄（1790～1849 年）の生涯を描いたものである。生来の型破りな性格と求道の精神から独自の神道一派をなしたが、その反体制的で異端的な教説により幕府の弾圧を受け、三宅島に流されて生涯を閉じた。

川端はこれを、矢橋三子雄著『誠忠美談 忍ぶ面影』（大正 15 年 7 月）中の「井上正鉄」の章を引き写すようにして制作している。そのため、矢橋の誤記をそのまま引きずった形となっており、たとえば遠島先を〈伊豆の大島〉とした矢橋の誤記を、本原稿はそのまま引きずっている。こうした制作方法ゆえに、本原稿は掲載に至らなかったとも想像されるが、詳細は不明である。もっとも、川端なりの工夫もいくつか指摘することができる。矢橋のやや古風な言い回しを改めて簡潔なもの言いとし、会話文を多用して臨場感が出るように改変されている。また、井上正鉄が青年期に抱いた人生の〈迷い〉や、その反体制的な姿勢が強調されている。近代的な人間像により近づけた形と言える。

昭和 4 年 1 月から昭和 7 年 6 月まで、川端康成は 9 本の作品を大衆向け娯楽雑誌「講談倶楽部」に掲載している。その大半は道徳的教訓を含む偉人伝や奇談であり、いずれも典拠があったと想像される時代物や外国物語である。したがって、「勤王の神」も雑誌「講談倶楽部」向けの原稿であったと考えるのが自然である。

夫人の川端秀子『川端康成とともに』（昭和 58 年 4 月）によれば、昭和 3 年前後は経済的に困窮する日々が続いており、質屋通いも頻繁に行われていた。川端康成自身も、インク代にも事欠いたと語っている。一時、新聞連載小説「海の火祭」のまとまった稿料を手にしたこともあったが、すぐに熱海の鳥尾子爵の別荘を借り、半年程で家賃滞納のまま引き払うこととなった。銀行の大卒初任給が 70 円程度だった時に、この別荘の家賃は 120 円だった。川端康成の型破りな生活ぶりは、井上正鉄の人生と通じるところがある。本原稿は川端康成の生活ぶりを明らかにする資料として、また、執筆年代が未確定なままの原稿を特定する意味でも、貴重である。

なお、詳細な翻刻と考察は、「国文鶴見」（第 47 号、平成 25 年 3 月）に掲載された。

（片山倫太郎）

2. 川端康成　書簡

（昭和 28 年 3 月 18 日、「鎌倉市長谷二六四　川端康成」より「東京千代田区神田神保町二丁目　三笠書房　竹内道之助」宛）

宛名の竹内道之助は、三笠書房の創立者である。また、竹内はイギリスの作家Ａ.Ｊ.クローニンの翻訳家としても知られ、三笠書房より『クローニン全集』を刊行している。展示の書簡は、鎌倉の自宅より三笠書房の竹内道之助に出されたものであり、刊本を「二十部御送りいただきたくよろしくお願申し上げます」と記されている。この著作は、おそらく同年（昭和 28 年）2 月 10 日に三笠書房から刊行された川端の短篇集『再婚者』をさすのであろうと推測される。同書の川端の「あとがき」によれば、『再婚者』はフランス文学者の淀野隆三のすすめもあって戦後の短篇小説の中から編まれた作品集である。

（山田吉郎）

3. 川端康成　自筆原稿『東京の人』

初出掲載新聞「北海道新聞」（昭和 30 年 8 月 11 日）コピー
『完結東京の人』（昭和 30 年 12 月、新潮社）

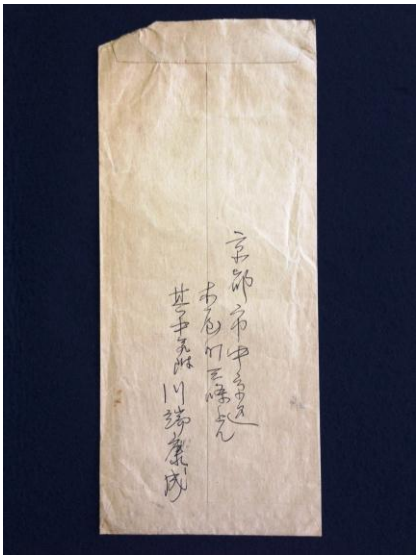
展示資料は、川端の作品中で最も長い『東京の人』の一部である。昭和 29 年 5 月 20 日から昭和 30 年 10 月 10 日まで、「北海道新聞」「中部日本新聞」「西日本新聞」に連載され、『東京の人』『続東京の人』『続々東京の人』『完結東京の人』（それぞれ昭和 30 年 1 月、5 月、10 月、12 月、新潮社）として順次刊行された。原稿における訂正の仕方は独特である。女体の描写をひと言ずつ、試行錯誤しながら書き付けていく様子がうかがえる。

（片山倫太郎）

4. 川端康成書簡

（昭和 36 年 4 月 25 日、「京都市中京区木屋町三條上ル其中気附　川端康成」より「東京都新宿区矢来町七□　新潮編集部　菅原」宛）

これだけしか進まず、／朝五時になり、このごろ余／り徹夜はしませんので、くたびれ／て書けません。間に合ひます／なら、午後三時か四時ごろ／までに仕上げます。間に合／はぬなら休ませて下さい。



雑誌「新潮」の実質的な編集責任者であった菅原国隆（すがわら・くにたか）宛の書簡である。「新潮」に連載していた『眠れる美女』の「第 12 回」（「新潮」昭和 36 年 6 月号）が同封されていたと思われる。「第 12 回」は、後に単行本として出版された際の「その四」の冒頭にあたる。

当時、川端は『美しさと哀しみと』『古都』の取材と連載のため、「京都市左京区下鴨泉川町 25 番地」に家を借りていた。差し出しの住所は、懇意にしていたバーのマダム・おそめ（上羽秀）の経営する「おそめ会館」を指すのではないかと思われる。

（片山倫太郎）

5. 芥川龍之介　書簡（大正 10 年 1 月 9 日　香取秀真宛）

『芥川龍之介全集　第 19 巻』（1997 年 6 月、岩波書店）所収。

芥川龍之介(あくたがわ・りゅうのすけ)　明治 25～昭和 2（1892～1927)。小説家。東京市生まれ。東大卒。漱石門下。大正 5 年、「鼻」を漱石に激賞され、文壇の注目を浴びる。以後、数々の作品を執筆するが、昭和 2 年、「ぼんやりとした不安」のために、睡眠薬を過剰摂取し自殺する。遺稿である「或旧友へ送る手記」（昭和 2）中の「末期の目」という言葉は、川端康成のノーベル賞受賞の際のスピーチ「美しい日本の私」（昭和 43）において世界に紹介された。代表作に、「羅生門」（大正 4)「鼻」（大正 5)「地獄変」（大正 7)「歯車」（昭和 2)「河童」（昭和 2)「或阿呆の一生」（昭和 2）等がある。

展示資料は、香取秀真（かとり・ほずま　明治 7～昭和 29（1874～1954）　彫金工芸作家、歌人）に宛てたもの。当時、芥川と香取は隣人同士であり、芥川は「お隣の先生」と呼んで、歌や趣味の教えを受けた。展示資料においても歌についてのやりとりが見られ、親交の深さが窺える。

（糸日谷輝）

6. 谷崎潤一郎　書簡（昭和 24 年 11 月 15 日　和気律次郎宛）

全集未収。

谷崎潤一郎（たにざき・じゅんいちろう）明治 19～昭和 40（1886～1965）小説家。東京市生まれ。東大中退。弟子の今東光を通じ、大学時代の川端と知り合う。後に川端は、昭和 8 年 7 月号の「新潮」で谷崎の「春琴抄」を絶賛した。谷崎は川端とともに日本を代表するエロティシズム文学の大家であり、谷崎文学は海外でも高い評価を得た。谷崎は 4 度ノーベル文学賞候補となり、昭和 35 年には最終候補の 5 人の中にも選ばれていた。代表作に、「刺青」（明治 43)「痴人の愛」（大正 13)「春琴抄」（昭和 8)「陰翳礼讃」（昭和 8)「細雪」（昭和 18～22）等がある。

展示資料は、和気律次郎（わけ・りつじろう　明治 21～昭和 50（1888～1975）翻訳家、小説家）に宛てたもの。和気は、元大阪毎日新聞社社員。小説執筆や翻訳も行った。文中の「奥村さん」とは、谷崎と親交の深かった、元大阪毎日新聞社社長の奥村信太郎であろう。文中でも和気に「御なつかしく存じ居候」と記されており、大阪毎日新聞社との親しい交流が窺える書簡である。

（糸日谷輝）

7. 横光利一　書簡（昭和 15 年 6 月 15 日　清水一継宛）

全集未収。

横光利一(よこみつ・りいち）明治 31～昭和 22（1898～1947）小説家。福島県生まれ。早大高等予科中退。大正 12 年 1 月、菊池寛が創刊した「文芸春秋」の編集同人となり、この折に川端康成と知り合う。以後、終生の親友であった。大正 13 年 10 月には川端と共に「文芸時代」を創刊し、新感覚派の旗手となった。川端は横光の葬儀において、「君の名に傍へて僕の名の呼ばれる習はしも、かへりみればすでに二十五年を越へた」と弔辞を述べた。代表作に、「御身」（大正 13)「日輪」（大正 12)「蠅」（大正 12)「上海」（昭和 3)「機械」（昭和 5)「旅愁」（昭和 12～22）等がある。

展示資料は、清水一継（中央公論社の編集者）に宛てたもの。横光は、昭和 15 年 1 月、「寝園」を「中央公論」に発表していた。「このごろは悪い風邪が流行しておりますから御用心下さい」「うがひ肝心です」と、相手を気遣う様子が見受けられる。

（糸日谷輝）

8. 宇野千代　書簡（昭和 9 年 5 月 19 日、山口嘉夫宛）

宇野千代(うの・ちよ) 明治 30～平成 8（1897～1996）小説家。山口県生まれ。岩国高女卒。大正 6 年に上京。様々な職を経て、本郷のレストランに勤めていた時、「中央公論」の編集長滝田樗陰や今東光、芥川龍之介、佐藤春夫などの作家と知り合う。大正 9 年藤村忠と結婚。短編「脂粉の顔」が「時事新報」（大正 10 年 1 月）の懸賞小説に一等で当選。本格的な作家活動に入る。その後は恋多く華やかな私生活と執筆活動を両立していた。主な作品に『色ざんげ』（昭和 10 年）『おはん』（昭和 32 年）などがある。

昭和 3 年 5 月、川端康成は千代の夫であった尾崎士郎に誘われ大森の馬込文士村に転居し、以来、尾崎、千代夫婦との繋がりが続いた。

展示資料は山口嘉夫にまた遊びに来るよう誘う内容が書かれている。山口嘉夫については不明だが、昭和 9 年は恋人であった東郷青児との関係が破綻し、青児は 5 月に他の女性と結婚したと年譜にあり、宇野千代の知らない所で色々複雑な事情が進行していたようである。

（香山涼子）

9. 宇野千代　自筆原稿「糸瓜」（小説）

初出不明、全集未収。

父の一周忌を終えた娘のお親と母の話である。残された母子の不安が、鬱蒼とした家の庭先を通して語られている。そして家に伝っていた糸瓜の蔓を見て、これが幸のさまたげになっていたんだわと、お親は包丁で根元から蔓まですっかり切ってしまう。どこか薄ら寒い余韻を残して物語は終わる。

（香山涼子）

10. 菊池寛　書簡（昭和 17 年 12 月 30 日　吉川英治宛）

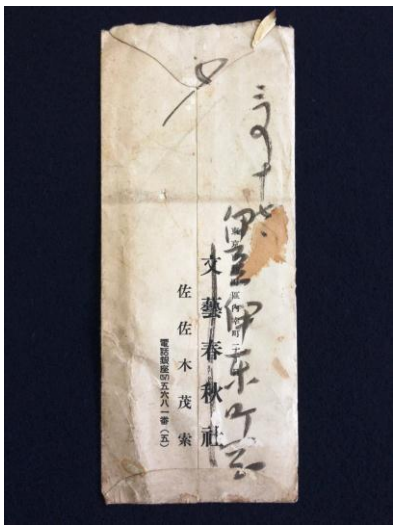
全集未収。

菊池寛(きくち・かん)　明治 21～昭和 23（1888～1948）小説家、劇作家。本名は寛（ひろし）。香川県生まれ。京大卒。大正 3 年、第三次「新思潮」発刊の折には芥川龍之介ら一高時代の同級に勧誘され、同人となる。大正 5 年、時事新報社会部記者となり、雑誌編集に携わる。大正 12 年には芥川龍之介、横光利一、川端康成らを同人として、「文芸春秋」を創刊。昭和 3 年には文芸春秋社を設立し、初代社長となる。昭和 10 年には芥川賞、直木賞を制定した。代表作に、「父帰る」（大正 6）「無名作家の日記」（大正 7）「恩讐の彼方に」（大正 8）等がある。

展示資料は、吉川英治（よしかわ・えいじ　明治 37～昭和 37（1892～1962）小説家）に宛てたもの。菊池は『日本競馬読本』（昭和 11 年、モダン日本社）を刊行するなど、競馬に対する造詣が深く、展示資料の中にもダービーに関する話題が出ている。菊池の競馬好きが窺える書簡である。

（糸日谷輝）

11. 佐佐木茂索　書簡（昭和 20 年 3 月 17 日　久米正雄宛）



佐佐木茂索(ささき・もさく）明治 27～昭和 41（1894～1966）小説家、編集者。京都市生まれ。小学校卒。芥川門下。小島政二郎・瀧井孝作・南部修太郎とともに「龍門の四天王」と呼ばれた。大正 12 年 1 月創刊の「文芸春秋」に同人として加わり、川端康成と出会う。大正 13 年 10 月には横光利一、川端他と「文芸時代」を創刊。昭和 4 年、文芸春秋社に入社し総編集長となった。昭和 10 年、菊池寛と共に芥川賞、直木賞を制定した。昭和 21 年には文芸春秋新社の社長に就任した。代表作に、「ある死・次の死」（大正 10）「曠日」（大正 13）等がある。

展示資料は、久米正雄(くめ・まさお　明治 24～昭和 27（1891～1952）小説家、劇作家）に宛てたもの。伊豆に疎開中の書簡である。昭和 20 年は、空襲が激化し、「文芸春秋」は遂に発行不可能になり、4 月号より休刊のやむなきに至った年であった。その中で、佐佐木は「どうしてよいやら忙しくて閉口」「此手紙より先に文庫へ伺うか鎌倉へ余るか今のところ予定もつかぬ状態」と、多忙を極めていたことが窺える。

（糸日谷輝）

12. 三島由紀夫　書簡（昭和 31 年 7 月 15 日　西久保三夫宛）

全集未収。

三島由紀夫(みしま・ゆきお）大正 14～昭和 45（1925～1970）小説家、劇作家。本名は平岡公威(ひらおか・きみたけ)。東京市生まれ。東大卒。昭和 21 年、川端康成の推薦により、「煙草」を雑誌「人間」に発表し、文壇に登場する。昭和 33 年に杉山遥子と結婚。川端が仲人を務めた。昭和 45 年、自衛隊市ヶ谷駐屯地にて、盾の会の森田必勝他 3 名と共に自衛隊の決起を促すも果たせず、東部方面総監室で割腹自決を遂げた。葬儀の際、葬儀委員長を川端が務めた。代表作に、「仮面の告白」（昭和 24）「金閣寺」（昭和 31）「憂国」（昭和 36）「豊饒の海」（昭和 40～46）等がある。

展示資料は、西久保三夫（にしくぼ・みつお　大正 6～平成 5（1917～1993）編集者）に宛てたもの。西久保三夫は、雑誌「ミュージカル」の創刊者。三浦時彦のペンネームで劇評を執筆した。『三島由紀夫全集 38 巻』（新潮社　平成 16 年）に収められている西久保三夫との書簡のやり取りを参照するに、たびたびミュージカルのチケットを譲られる等、親しい交流があった。展示資料においても、「切符ありがたうございました」と、ミュージカルのチケット郵送に対する謝辞が見られる。

（糸日谷輝）

13. 高見順　自筆原稿「女の出発」

初出「オール読物 7 月号（年不詳）」

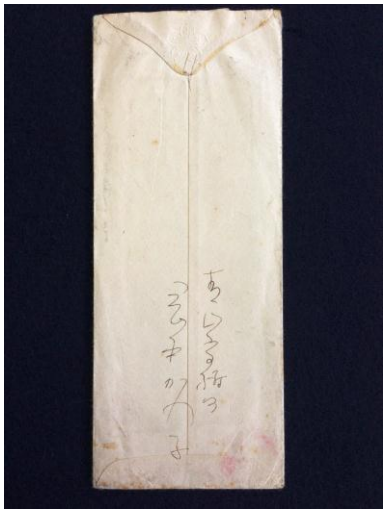
高見順（たかみ・じゅん）明治 40～昭和 40（1907～1965）小説家。本名は高間義雄（たかま・よしお)、のち芳雄。福井県生まれ。東大卒。昭和 8 年、同人雑誌「日歴」を創刊。第 7 号より「故旧忘れ得べき」を連載し、これが第一回芥川賞候補に選ばれ文壇の注目を浴びる。昭和 37 年から、川端康成らと共に日本近代文学館の設立を呼びかけ、癌に侵されながらも運動を推進し、設立を成功さ

せた。代表作に、「故旧忘れ得べき」（昭和 10）「如何なる星の下に」（昭和 14～15）「昭和文学盛衰史」（昭和 27～32）「いやな感じ」（昭和 35～38）等がある。

「女の出発」は、全集及び単行本未収録作品である。展示資料は、10 行 20 字詰めの原稿用紙 36 枚で、内容は第三章の途中までのものであろう。大学生「美佐子」の、自由奔放な姿を描いている。

（糸日谷輝）

14. 岡本かの子　書簡（年月日、宛先不明）



岡本かの子(おかもと・かのこ)　明治 22～昭和 14（1889～1939）小説家、歌人、仏教研究家。本名カノ。旧姓大貫。東京生まれ。跡見女学校卒。次兄雪之助（号晶川）の影響で短歌を「明星」等に発表。明治 43 年岡本一平と結婚。子息は芸術家の岡本太郎。歌集『かろきねたみ』（大正 1 年）や『愛のなやみ』（大正 7 年）を刊行し、その後『わが最終歌集』（昭和 4 年）で歌人から小説家への転身を決意表明した。

展示資料は、かの子の家に宛先の人物が訪ねてきたが、かの子は法要で家を留守にしていたため会えず、その謝罪を綴った内容である。

（香山涼子）

15. 岡本かの子　書簡（昭和 9 年 10 月 25 日、楢崎勤宛）

当時かの子は 45 歳。ちょうど釈尊生誕 2500 年、弘法大師没後 1100 年の記念の年にあたり、仏教ルネッサンスの機運が隆盛になった。その為、かの子は仏教関係の著述で多忙を極めるが、8 月に岡本夫婦で川端康成の家を訪ね、小説の指導と閲読を依頼し、小説への情熱は忘れていなかった。川端康成はかの子の文壇デビュー作となった「鶴は病みき」（昭和 10 年）の推薦文を書き、また川端が亡くなった時の絶筆が、かの子全集に載せるための著述であったと言われており、二人の縁は深かった。

楢崎勤(ならさき・つとむ) 明治 34 年～昭和 53 年（1901～1978）小説家、編集者。山口県生まれ。同志社大学中退。大正 14 年新潮社に入社し、雑誌「新潮」の編集を担当する。その傍ら新興芸術派の小説家としても活動しており、『神聖な裸婦』（大正 10 年）などの作品を刊行している。

展示資料は早慶戦の切符を同封する旨が書いてある。小説家を志していたかの子は小説家でもあり編集者でもあった楢崎と懇意になりたいと思っていたのであろう。

（香山涼子）

16. 岡本かの子　書簡（昭和 10 年 6 月 15 日、阿部保宛）

かの子が 46 歳の時の書簡である。当時は小説家を目指しながらも、中々文壇進出が叶わず、堪え忍んでいた時期であり、どちらかと言えば仏教研究者としての依頼が多くきていた時期である。

阿部保(あべ・たもつ) 明治 43 年～平成 19（1910～2007）詩人、美学者、英文学者、北海道大学名誉教授。山形県生まれ。東京帝国大学文学部美学美術史学科卒。第 3 次『椎の木』同人として百田宗治に師事したほか、エドガー・アラン・ポーなど米国詩人の研究、翻訳を行っている。詩集『紫夫人』（昭和 28 年）『冬薔薇』（昭和 30 年）など刊行しているが、かの子との関係は不明である。

展示資料は阿部保を「きねや」先生と慕い、先生の病気を見舞う内容となっている。

（香山涼子）

17. 中里恒子　自筆原稿「失われぬ新鮮さ」（随筆）

初出不明、全集未収。

中里恒子(なかざと・つねこ）明治 42～昭和 62（1909～1987）小説家。本名恒。神奈川県生まれ。藤沢の富商の家に生まれる。神奈川高女卒後、昭和 3 年「創作月刊」に「明らかな気持ち」「砂の上の塔」の習作を発表。「従兄妹同志」（「山繭」昭和 3 年 10 月）では横光利一に師事する機縁が生じ、女性同人誌「火の鳥」の同人にもなる。結婚後創作活動を一時中断するが、後に「文学界」に「花亜麻」が掲載され、川端康成、堀辰雄らの知遇を得た。昭和 14 年に「乗合馬車」で女性作家初の芥川賞を受賞する。また新人作家の育成に熱心であった川端康成は、かつて無名であった中里恒子に少女小説「乙女の港」（昭和 12 年～13 年「少女の友」連載）を代筆させ、その原稿料を中里に渡し経験を積ませていた。

この「失われぬ新鮮さ」は、昔見た作品を何年か経て再び見ることによって、新たに得られる発見と感動があると述べ、ここではヘルマン・ヘッセの作品を取り上げている。

（香山涼子）

18. 中里恒子　自筆原稿「隣人」（随筆）

初出不明、全集未収。

「隣人」と題されたこの随筆は、いざという時に頼りになるのは、遠くの身内よりも近くの他人であるのだと、ある老婦人の体験を通して語られている。老婦人が骨折してしまった時、世話になったのは離れた子供達ではなく、小女や以前は折り合いの悪かった隣家の主婦であった。その主婦とは今まで付き合いがなかっただけに、老婦人はその親切をとても有り難く感じた。不運になって初めて、彼女は隣人の情を知ったのだと言う。

（香山涼子）

19. 中里恒子　自筆原稿「ソ聯美人にアメリカ男・エレガント喜劇の異色」（随筆）

初出不明、全集未収。

内容は艶笑喜劇「絹の靴下」について書かれている。この映画は「ニノチカ」と言う昔の映画をミュージカル調に再映画化したものであるが、リメイクではソ連美人の恋人をアメリカ男にするなど、冷戦を痛烈に皮肉り、現代の新しい感覚を加えている所に面白味が強化されていると述べている。

（香山涼子）

20. 中里恒子　自筆原稿「伊達のうす着」（随筆）

初出不明、全集未収。

諺にある「伊達の薄着」について書かれている。「伊達の薄着」とは、着膨れして格好が悪くなるのを嫌い、寒いときでも我慢して薄着をとおすことである。しかし、中里恒子はここで、薄着は外観だけのお洒落ではなく、寒い時に平然とした顔つきでいられる気力こそ粋なのだと語っている。

（香山涼子）

21. 中里恒子　自筆原稿「幸福なる風景―Ｔ夫人への手紙」

初出『幸福の思索』（昭和 23 年、糸書房刊）に発表。

この「幸福なる風景」は副題にあるように、Ｔ夫人に向けて幸福とは何かと、手紙のような形式で綴られている。ここで中里恒子は、精神の内側にある喜びや美しさを発見し創造する能力と、全てに謙譲な神の摂理を識る心こそが幸福の根源であり、日常生活の小さな幸福を発見する心が、大きな幸福へ繋がる心だと述べている。

（香山涼子）

*1